

## 七不思議の謎にせまる③

## 知識人による記録と江戸の怪異

江東区深川江戸資料館

本号では、①江戸の知識人たちはどのような怪異を記録し、そうした怪異をどのように認識していたのか、②江戸の社会において、怪異がどのような形で展開したのか、について考えてみたいと思います。

## 1 知識人の怪異へのまなざし

## (1) 根岸鎮衛『耳囊』の執筆と怪異

著者は勘定奉行・南町奉行を歴任した、幕臣・根岸鎮衛です。『耳囊』は、彼が佐渡奉行在任中(天明4年(1784)～同7年(1787))に筆を取り始めたといわれる随筆です。その内容は、人情話や事件・民間療法などに関する話等、人々から聞いた雑談のうち、著者が興味を覚えた様々な話題が記録されています。とりわけ「妖怪なしともきめ申しがたき事」や「幽霊なしともきめ難き事」などと題した、「怪異」に関する記事が豊富に記録されています。著者はなぜ『耳囊』を執筆したのでしょうか。序文には、次のようにあります。

「耳にとどまりて面白きと思し事ども、又は子弟の心得にもならんと思ふ事、書きとめて一囊に入れ置きしに、塵積り山とはなりぬ」、「数多きうちには偽の言葉もありぬべけれど、語る人の偽は知らず、見聞きし事を有りの俚に記して、予が子弟に残し置きぬ。他門の見ん事はかたく禁しめぬれば、文章の拙きもまた取かざるべきにあらず。」(根岸鎮衛『耳囊』1(平凡社、2000年)、P25)

つまり、これらの記録は、他者に見せる事を目的とせず、あくまでも子孫の為に残したものでした。しかし、追々にこの本は転写されて流布したので、多くの写本が残され、現在も、「怪談本」の一つとして著名です。この『耳囊』に集められた怪異は、著者の好事家的な興味からのみならず、人知を超えた存在への畏れや怪談の裏に隠された人間の欲深さなど、子孫に対する教訓としての意味合いが含まれていました。では、江戸にはどのような怪異が起きたのでしょうか。

## (2) 『文化秘筆』に見る怪異との遭遇 一描かれた怪異一

『文化秘筆』(著者不詳)には、化政期(1804～1829)の約10年間の見聞が記録されています。そうした記録の1つに、次のような話と挿絵が紹介されています。



【図1】傘の中に現れた妖怪(『文化秘筆』、国立国会図書館所蔵)

文政2年(1819)、水戸藩の御役者・山本勝之助は、雨風の為に傘をさして江戸の町を歩いていました。すると、ちょうど若狭国(現・福井県)小浜藩主・酒井若狭守屋敷の前で、【図1】の妖怪に遭遇した、というのです。

この話を聞いた筆者は、記事の末尾に「誠に事実ニ御座候」と書き添えています。このように、江戸時代の見聞記や随筆には、たびたび怪異の“姿”が描かれました。では、江戸に住む知識人は怪異をどのように考えていたのでしょうか。

## (3) 『甲子夜話』にみる松浦静山と怪異

著者は肥前国平戸藩(現・長崎県)の藩主松浦清です。一般には「松浦静山」という呼び名の方が著名でしょう。彼が隠居後に執筆した随筆が『甲子夜話』です。静山が

没する天保12年(1841)まで、約20年間にわたり書き続けられました。この『甲子夜話』にも世にも奇妙な事柄が多数記録されています。では、静山は江戸の巷で起こる怪異に対して、どのような考えをもったのでしょうか。次の記事をみてみましょう。

ある日、旗本松浦越前守のえちぜんのかみのえりしや下屋敷に、柿色の衣を着た老夫が現れました。そして、老夫は越前守に対して「(私は)久しくこの地に住む者だが、最近ここでほうじつ砲術の稽古が行われるようになるので子供たちが怖がっております。お願いですから、試射場は他の場所に移してください」と懇願してたちまち姿を消してしまいました(意訳)。(続篇63巻の6)

この話を聞いた静山は「これまさ正しく砲場の辺なる狐穴の老狐、その形を変じてをしならんと」と狐の仕業であると推理し、「狐妖の真話、奇と謂べし」と書き記しています。武士、それも江戸に住む大名がこり狐狸の靈験を信じていたのです。

## 2 怪異の展開 — 娯楽としての怪異 —

江戸に住む知識人の記録を見ていくと、恐るべき怪異の一方で、怪異を題材とする見世物や芸能の記事を頻繁に目にする事ができます。そこで、ここでは人々の娯楽として展開した怪異についてみていきたいと思います。

### (1) 妖怪手品

妖怪手品とは「幽霊出現などの怪異現象を、種や仕掛けによって人為的に作り出す娯楽」であり、研究者による造語です。江戸時代には、「座敷へろくろ首を出し見せる伝」(『盃席玉手妻』)や「しやれこうべを即座に作り出す術」(『神仙秘事謎』)など、素人向けの伝授本が数多く世間に出回りました。一方で、竹沢藤次や柳川一蝶斎などのプロの芸人は、大道具・大仕掛けで見物人に恐怖を与え、大好評を博しました。とりわけ、竹沢藤次の曲独楽に至っては、客が大入りの為に、二階が落ちて死傷者を出すほどの盛況ぶりでした(『藤岡屋日記』)。

### (2) 怪談咄の祖・林屋正蔵と人形師・泉目吉

江戸の落語に怪談咄ができたのは化政期頃(1804～1829)の事でした。怪談咄の祖・林屋正蔵は、西両国



【図2】泉屋目吉の店先の様子(為永春水『春色恵之花』、早稲田大学図書館所蔵)

に寄席を構え、「御目印 元祖 大道具 大仕掛 妖怪ばなし 林屋正蔵」(林屋正蔵『百歌撰』)という看板を掲げて、日本全国から客を集めました。正蔵の怪談咄(「化物咄」)で使用する、大仕掛けの道具を製作していたのが、人形師・泉目吉という人物です。【図2】は、泉目吉の店先の様子です。「踊道具」御詠向怪談物品々々と記した看板が掲げられ、幽霊の人形などが陳列されています。怪異が人々の娯楽として扱われている様子が見てとれます。

## 3 江戸の社会と怪異

江戸時代とは、知識人により“怪異”が注目された時代でした。とりわけ江戸に住む知識人は、巷間に流布する怪異にアンテナを張り、自らも少なからず狐狸の靈験や未知なる存在を信じていました。江戸の巷には怪異があふれていたのです。また一方で、江戸の社会では、怪異が芸能の中に取り入れられ、人々に娯楽として提供されました。本ノートのテーマでもある「七不思議」もまた、人々に恐れ信じられた側面を持つとともに、口碑に伝わる過程で、講談などの題材となり、あるいは地域の観光スポット化するという点で、人々の娯楽的な性格を持っていたといえるでしょう。

「七不思議」は、中世以来存在していましたが、江戸時代において、頓に脚光を浴びました。こうした背景の一つには、怪異に対する恐怖を持ちつつも、それを娯楽として楽しんでしまおう、という江戸人のユーモア精神があったといえるでしょう。

こうした、現在にも繋がる“怪異へのまなざし”は、江戸時代に生まれたといえるのではないのでしょうか。